



Title	斜面積雪の挙動の研究 XIX : 積雪の塑性ポアソン比 3
Author(s)	大泉, 三津夫; OH'IZUMI, Mitsuo; 藤岡, 敏夫 他
Citation	低温科学. 物理篇, 43, 59-67
Issue Date	1985-03-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/18500
Type	departmental bulletin paper
File Information	43_p59-67.pdf



斜面積雪の挙動の研究 XIX

—積雪の塑性ポアソン比3—

大泉三津夫・藤岡 敏夫

(北海道大学大学院 理学研究科) (低温科学研究所)

(昭和59年10月受理)

1. はし が き

斜面積雪内の応力や積雪が構造物に及ぼす雪圧を、応力と歪速度との間の構成方程式から計算する際、密度や雪質に応じた塑性ポアソン比 ν が必要となってくる。

著者らは平地積雪の均質な雪層で、鉛直方向の雪圧 P_v と水平方向の横圧力 P_h を厚さの薄い円板型雪圧計で測定し、線型構成方程式を仮定して ν を求めた(大泉, 藤岡^{1,2})。更に、最大傾斜線を含む鉛直面(以下、流動面と呼ぶ)内で平面歪を生じる、層境界がほぼ平行な斜面積雪で2種類の雪圧を測定した。これらの値と別に得られた主歪速度の値から流動面内の主応力 σ_1, σ_3 、剪断粘性係数 η 、塑性ポアソン比 ν の2週間平均値を計算した(大泉, 藤岡²)。計算で得られた σ_1, σ_3 は穿孔法(清水³)で得られた主応力と一致し、 ν の値も平地積雪で得られた値と一致した。

しかし、ここで得られた主応力は2週間の平均値であり、これより短期間の応力状態を知ることにはできない。又、平地積雪で得られる ν と斜面積雪で求まる ν とは応力状態が異なるため、 ν に違いが生ずる可能性がある。

今回は、(1)雪圧計の直径の測定値への影響を平地積雪で調べ、(2)斜面積雪で流動面内に存在する3個の雪圧を連続的に測定し、同じ面内の主応力 σ_1, σ_3 をこの3個の雪圧とそれらの方向だけを使って求めた。更に、(3)等高線方向の主応力 σ_2 の測定値と σ_1, σ_3 から ν を計算し、平地積雪で得られた ν と比較した。

2. 方 法

2-1. 構成方程式と塑性ポアソン比 ν

雪は粘弾性体であるが、応力が小さい場合、近似的に圧縮性ニュートン粘性流体とみなすことができる(Mellar and Smith⁴, Salm^{5,6})。Salm⁶はこの近似が可能な応力の目安として10kpaという値を与えている。ここで扱う平地積雪や斜面積雪では、通常、積雪上部荷重(積雪水量)はこの応力値と同じ程度である。それ故、ここでは取り扱い易さを考慮して、雪を等方均質な圧縮性ニュートン粘性流体と仮定する。この時、主応力 σ_i ($i=1,2,3$)と主歪速度 $\dot{\epsilon}_i$ との間に

* 北海道大学低温科学研究所業績 第2684号

$$\dot{\epsilon}_i = \frac{1}{2\mu(1+\nu)} \left(-\nu I_1 + (1+\nu)\sigma_i \right) \quad (1)$$

が成り立つ。ここで I_1 は応力の1次不変量、 ν は塑性ポアソン比、 μ は剪断粘性係数である。なお、前論文(大泉, 藤岡²⁾)では μ を η としている。 $\dot{\epsilon}_i$, σ_i は伸び又は引張り応力の場合を正とし、代数的に大きいものを $\dot{\epsilon}_1$, σ_1 とする。

平地積雪ではまわりを拘束された一軸圧縮歪が生じ、

$$\dot{\epsilon}_1 = \dot{\epsilon}_2 = 0, \quad \sigma_1 = \sigma_2 \quad (2)$$

が成り立つ。ここに $\dot{\epsilon}_1$, $\dot{\epsilon}_2$, σ_1 , σ_2 は水平面内に存在する主歪速度, 主応力である。雪圧計で鉛直方向の主応力 σ_3 ($= P_v$), 水平方向の主応力 σ_1 ($= P_h$)を測定すれば、

$$\nu = \frac{\sigma_2}{\sigma_1 + \sigma_3} \left(= \frac{P_h}{P_h + P_v} \right) \quad (3)$$

によって ν を求めることができる。(3)は(1)で $i=2$ とし、(2)を使うことによって得られる。

次に、流動面内で平面歪を生じる斜面積雪について考える。流動面内に存在する主応力と主歪速度を各々 σ_1 , σ_3 ($\sigma_1 > \sigma_3$), $\dot{\epsilon}_1$, $\dot{\epsilon}_3$ ($\dot{\epsilon}_1 > \dot{\epsilon}_3$)とし、これらに垂直な主値を代数的大小にかかわらず σ_2 , $\dot{\epsilon}_2$ ($= 0$)とする。平地積雪で(3)を求めた時と同様な手順で、

$$\dot{\epsilon}_2 (= 0) = \frac{1}{2\mu(1+\nu)} (\sigma_2 - \nu(\sigma_3 + \sigma_1))$$

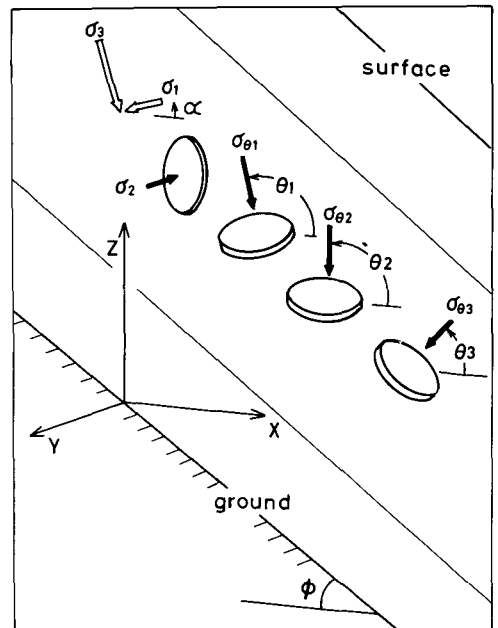
から、

$$\nu = \frac{\sigma_2}{\sigma_1 + \sigma_3} \quad (4)$$

が出てくる。 σ_1 と σ_3 は次節2-2で述べる方法で求め、 σ_2 は雪圧計によって実測した(第1図)。(3)と(4)は同じ式であるが、応力の場合が異なるため ν も異なる可能性がある。今後、(4)の ν を平地積雪で得られる ν と区別して ν_s と書く。

2-2. 斜面積雪内の主応力 σ_1 , σ_3 の連続測定

はしがきで述べた様に、前論文の主応力算出法では2週間の平均的な主応力しか求められない。これは、歪速度の測定期間が2週間であるためである。今回は雪圧計で流動面内に法線を有する面に働く垂直圧縮応力 $\sigma_{\theta i}$ と $\sigma_{\theta i}$ が水平軸(X軸)となす角度 θ_i を測定し(第1図)、3個の $\sigma_{\theta i}$, θ_i の組($i=1,2,3$)からモール円を使って σ_1 , σ_3 の値及び σ_1 がX軸となす角度 α を求めた。計算では先ず、



第1図 斜面積雪での雪圧測定

$\sigma_{\theta i}$ は流動面(Z-X面)内に存在し、水平軸(X軸)と θ_i の角度をなす垂直圧縮応力。 σ_2 は等高線(Y軸)方向の主応力。 σ_1, σ_3 は流動面内に存在する主応力、 α は主軸方向で計算で求める。

$$\begin{bmatrix} \sigma_{\theta_1} \\ \sigma_{\theta_2} \\ \sigma_{\theta_3} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos^2(\theta_1) & \sin^2(\theta_1) & \sin(2\theta_1) \\ \cos^2(\theta_2) & \sin^2(\theta_2) & \sin(2\theta_2) \\ \cos^2(\theta_3) & \sin^2(\theta_3) & \sin(2\theta_3) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \sigma_x \\ \sigma_z \\ \tau_{zx} \end{bmatrix}$$

から、行列演算で $\sigma_x, \sigma_z, \tau_{zx}$ を求め、次に

$$\begin{cases} \sigma_1 = A + B \\ \sigma_3 = A - B \\ \alpha = \frac{1}{2} \arctan \left(\frac{2\tau_{zx}}{\sigma_x - \sigma_z} \right) \end{cases}$$

から、 $\sigma_1, \sigma_3, \alpha$ を計算した。但し、

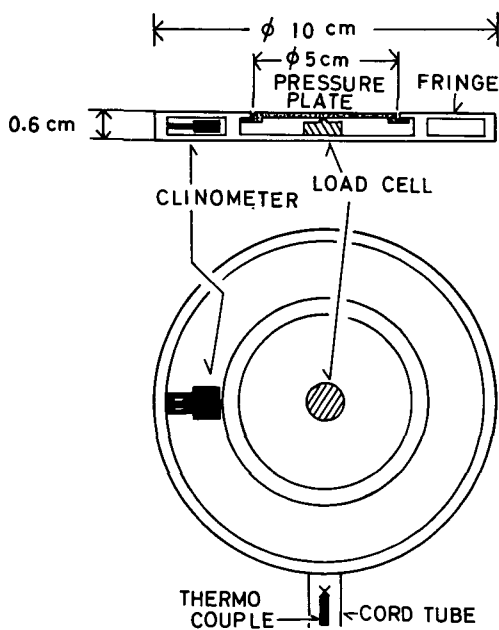
$$A = \frac{1}{2} (\sigma_x + \sigma_z)$$

$$B = \sqrt{\left(\frac{\sigma_x - \sigma_z}{2} \right)^2 + \tau_{zx}^2}。$$

2-3. 雪圧計

今回は厚さは 6 mm で同じであるが、受圧板と全体の直径が異なる 2 種類の大きさの雪圧計を用いた。両方とも受圧板にかかる雪圧を小型ロードセル（容量 500 gw）で電気的に検出するもので、同時に傾斜角、雪温も測定できる。第 2 図に示した雪圧計は前回の測定で用いた雪圧計を小型化して、直径 10 cm とし、ロードセルを 1 個に減らしたもので、斜面及び平地の積雪で用いた。もう一種類の雪圧計は前回使用した直径 15 cm の雪圧計である。どちらの雪圧計も積雪の自由な流動を極力さまたげない様に厚さを薄くし、更に、エッチ効果 (de Quervain⁷⁾) を避けるため受圧板の直径を全体の直径より小さくしてあるのが特徴である。

雪圧計の埋設方法は前回と同じである。データの読みとりは、平地積雪では 3 時間おきに、斜面積雪では 1 時間おきに自動的に行い、データ収録装置に記録した。以下に示す測定結果は全て日平均値である。



第 2 図 雪圧計

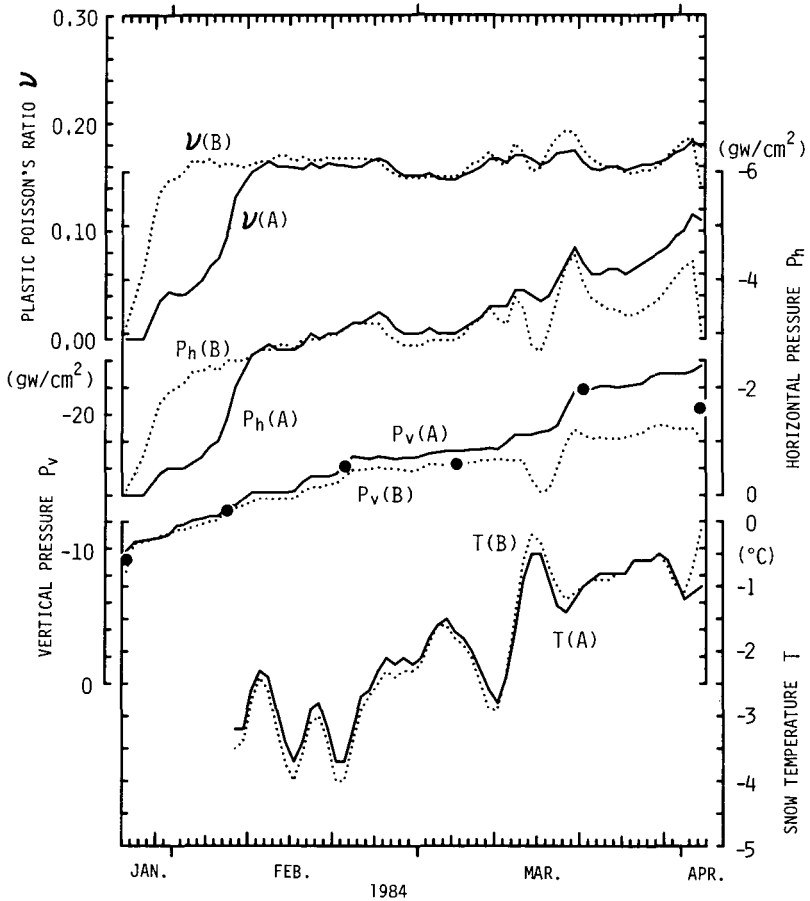
3. 結果と考察

3-1. 平地積雪で得られた塑性ポアソン比 ν

第 3 図に、北海道北部の間寒別にある北大天塩地方演習林庁舎裏の平地積雪で得られた鉛直圧力 P_v 、横圧力 P_h 、雪温 T 、塑性ポアソン比 ν の経過を示す。横軸は日付けである。圧力の

単位は gw/cm^2 、雪温の単位は $^{\circ}\text{C}$ である。圧力を負にとっているのが、雪圧を表わす軸には負の値が目盛っている。図の中で A (実線) と書き添えた値は第 2 図に示した直径 10 cm の雪圧計で測定した値で、B (点線) の添字の付いた値は直径 15 cm の雪圧計で得た値である。

約 2 週間おきに断面観測を行なった。第 1 表に雪圧計を埋めた層の断面観測結果と当日の P_v 、 P_h 、 ν の値を示す。上部荷重は雪圧計の受圧板上の単位断面を持った雪柱の重量で、鉛直圧力 P_v に相当し、積雪サンプラーで測定した。この値は第 3 図には黒丸で示してある。



第 3 図 平地積雪における鉛直圧力 P_v 、横圧力 P_h 、塑性ポアソン比 ν 、雪温 T の推移。
●は雪圧計上の上部積雪荷重 (積雪水量)。実線は第 2 図の雪圧計で得た値。点線は前論文 (大泉, 藤岡²⁾) で使用した雪圧計で測定した値。

第 3 図の鉛直方向の雪圧 $P_v(A)$ 、 $P_v(B)$ は、何れも、埋設後すぐに妥当な値を示し、上部荷重の値と一致している。一方、水平方向の雪圧 $P_h(A)$ 、 $P_h(B)$ は、埋設後約 2 週間を経て同一の値を示すようになった。 P_v が雪の重量による圧力で、 10 gw/cm^2 以上の値であり、雪と雪圧計との密着が短い時間で達成されるのに対し、 P_h は鉛直方向の雪の縮みによって生じる 2 次的な圧力で、その値も 5 gw/cm^2 以下と小さいため、密着するのに長い時間が必要となる。

雪圧計と雪との密着が完全となる 2 月 10 日前後から、融雪が始まり密着状態が再び悪くな

る3月中旬まで、 P_v 、 P_h ともAとBの測定値が大体一致している。今回雪圧計を挿入した雪層は、挿入時の厚さが20cm、密度0.29g/cm³の雪層である。以上の結果は、この程度の雪層に対しては、今回使用した2種類の大きさの雪圧計で測定値に差が生じることはなく、測定器の大きさの影響を考慮しなくてもよいことを示している。

2月7日から3月6日までの密度0.327g/cm³~0.370g/cm³のしまり雪の ν は、約0.16となり、前回得られた結果（密度0.28g/cm³~0.38g/cm³のしまり雪に対して、 $\nu = 0.15$ ）とほぼ一致する。

2月21日から3月6日までの第3図の ν 、 T と第1表の密度、雪質の変化に注目する。この期間、密度は一定で、雪質もこしもざらめ雪が混ざってくるが、ほぼ一定であった。雪温 T だけが変化を示し、 ν はほぼ一定である。この結果は、雪温は ν に殆んど影響しないという Salm⁵⁾の結果と一致している。

3-2. 斜面積雪での主応力の σ_1 、 σ_3

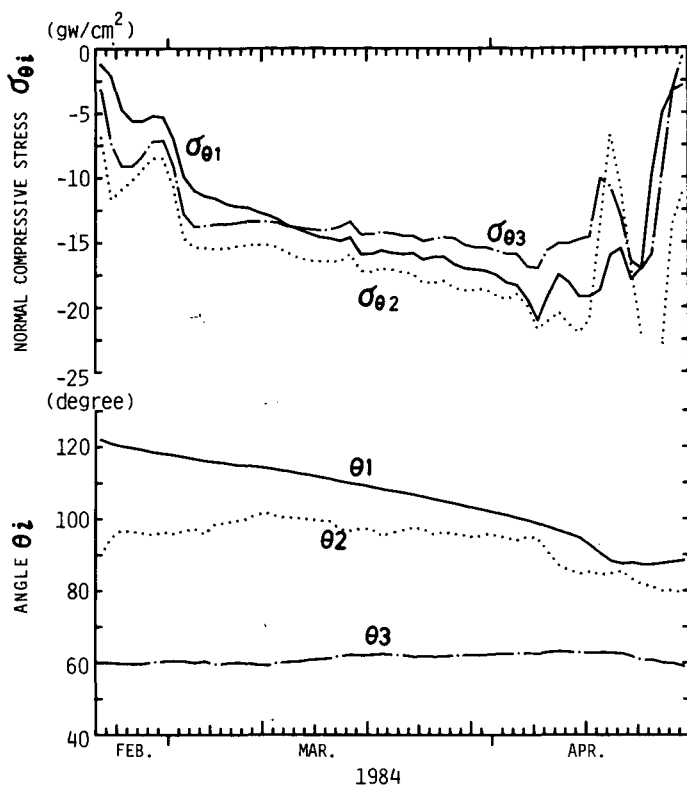
第4図に、同じく問寒別にある雪崩観測所の横にある傾斜角31°の斜面上の積雪で測定した垂直圧縮応力 σ_{θ_i} ($i=1,2,3$)と角度 θ_i の推移を示す。 σ_{θ_i} 用雪圧計は平地積雪での P_v 用雪圧計と同様に埋設後すぐに（通常2、3日で）雪との密着が良くなり、妥当な値を示す。他方、 σ_2 用雪圧計については、平地の P_h 用雪圧計と同様で、まわりの雪となじむのに時間がかかる。2月末から3月にかけての σ_{θ_i} の変動から、この時期に積雪内で急激な応力変化が生じたことが予想される。

著者らは、この雪圧計で積雪内の急激な応力変化を検出できるかどうかを確かめるため、人為的に応力状態を変えてみた。4月4日、雪圧計が埋まっている積雪の両側と斜面下方の雪を取り除き、長さ5.5m、巾2m、高さ1.36mの直方体の雪柱を切り出した。この雪柱より斜面上部の雪は短杭（長さ約30cm）によって流動がさまたげられており、雪柱と斜面上部の雪との接続部分は張力域となる。但し、底面での摩擦力の評価ができないため、この引張り応力を理論的に算出することはできない。この接続部分は第1図に示した σ_{θ_i} 用雪圧計と σ_2 用雪圧計の埋設位置の中間にあたり、それ故、 σ_2 の値は0にはならない。

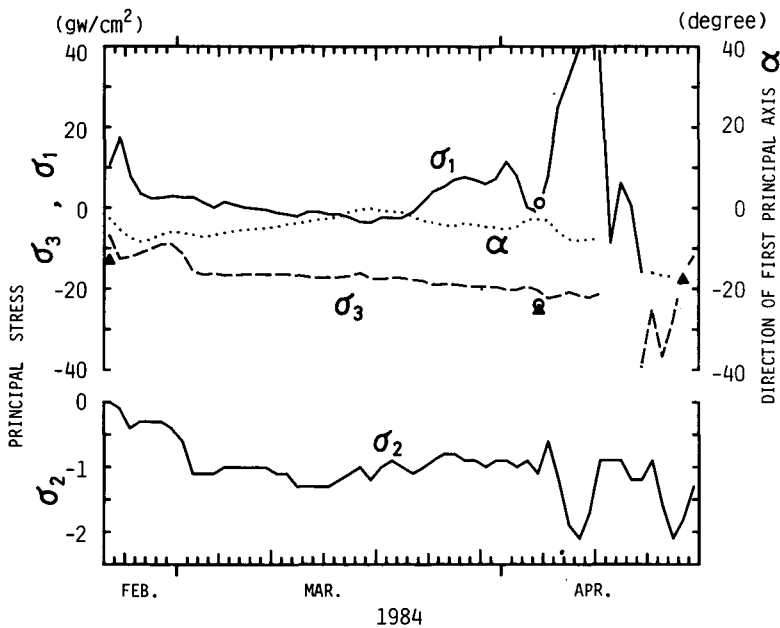
第5図に、測定の全期間について、 σ_{θ_i} と θ_i から計算した流動面内の主応力 σ_1 、 σ_3 、第1

第1表 平地積雪での断面観測結果と雪圧計による測定値

日付け	1/26	2/7	2/21	3/6	3/20	4/3
雪質	しまり雪	しまり雪	しまり雪	しまり雪 こしもざらめ雪	ざらめ雪 こしもざらめ雪	ざらめ雪
密度(g/cm ³)	0.286	0.327	0.370	0.370	0.404	0.410
上部荷重(gw/cm ²)	9.3	13.0	16.2	16.4	22.9	20.6
P_v (A)	9.8	13.2	16.2	17.3	21.9	23.6
(B)	8.3	12.9	15.4	16.4	18.5	18.2
P_h (A)	0	1.4	3.1	3.1	4.3	5.0
(B)	0.1	2.5	3.1	3.0	4.0	3.0
ν (A)	0	0.10	0.16	0.15	0.16	0.18
(B)	0.01	0.16	0.17	0.15	0.18	0.14



第4図 斜面積雪での垂直圧縮応力 $\sigma_{\theta i}$ と $\sigma_{\theta i}$ が X 軸となす角度 θ_i の推移



第5図 計算で求めた流動面内の主応力 σ_1 , σ_3 , 第1主軸の方向 α と実測した等高線方向の主応力 σ_2 .
 ▲は積雪の上部荷重.
 ○は力の釣り合い (藤岡⁸) から求めた主応力

主軸方向 α 、及び、雪圧計で実測した等高線方向の主応力 σ_2 の推移を示す。黒三角は雪圧計の位置 z での積雪の上部荷重 $w(=\int_z^{z_0} \rho dz, \rho$ は雪の密度、 z_0 は積雪表面のZ座標)であり、 α が0の時に σ_3 と等しくなる。白丸は w と α から後述する藤岡⁸⁾の計算式によって計算した σ_1, σ_3 である。但し、測定の初日と終日については藤岡の式による主応力計算は行なっていない。初日については、 $\sigma_{\theta i}$ 雪圧計の雪との密着が不完全なため、又、終日については、4月10日以後の第4図における $\sigma_{\theta i}$ の大変動から判る様に融雪によって再び密着が悪くなり、両日とも $\sigma_{\theta i}$ の値の信頼性が低く、 α が不正確なためである。

第5図から、藤岡の計算式から求めた主応力と雪圧測定だけから求めた主応力が一致していることが判る。4月初旬までの真の主応力 σ_3 は、この期間に α が 0° 近くにあることから、上部荷重 w とほぼ等しくなっていたと考えられる。雪圧測定から求めた σ_3 は、2月23日の w と4月4日の w とを結ぶ線分の近くに位置しており、真の σ_3 に近い値となっていた。上に述べた様に、人為的に応力状態を変えるまで α は 0° の近くにあり、 σ_1 の大きさも0に近くなっている。つまり、4月の初めまでこの斜面積雪は、吉田⁹⁾が述べた単独鉛直主応力状態を持続していた。

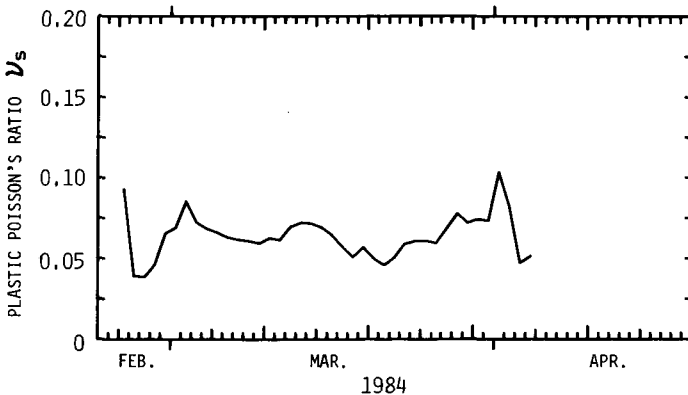
2月末から3月上旬までの σ_3 の変化は、第4図の $\sigma_{\theta i}$ の変動に対応したものである。同時に、 σ_2 の絶対値(ここでは圧力)が増加しているが、埋設直後のことであり、積雪内部の応力変化に対応したものかどうかは判らない。4月4日から10日まで σ_1 と σ_2 には大きな変化が見られ、人為的に張力域とした影響が表われている。以上の2例は積雪内の短期間の応力変化を知る測定手段として、この雪圧計が有効であることを示している。

藤岡⁸⁾は積雪に変形が生じて各層境界が平行であるならば、

$$\sigma_1/w' = -\sin \alpha / \sin (\alpha + \varphi)$$

$$\sigma_3/w' = -\cos \alpha / \cos (\alpha + \varphi)$$

が成り立つことを示した。ここに w' は斜面に垂直な単位断面をもつ雪柱の重量で、 $w' = w \cos \varphi$ が成り立つ。 φ は斜面の傾斜角である。この2式で α が負から0に近づくと、 σ_1/w' は大きく減少するが、 σ_3/w' はほとんど減少しない。第5図の3月中の σ_1, σ_3 と α の関係は、定性的に藤岡のこの計算式と一致している。



第6図 斜面積雪で得られた塑性ポアソン比 ν_s の推移

3-3. 斜面積雪で得られた塑性ポアソン比 ν_s と平地積雪で得た ν との比較

第6図に、第5図の σ_1 , σ_2 , σ_3 から求めた4月4日までの斜面積雪の塑性ポアソン比 ν_s を示す。2月23日の雪の密度は 0.285g/cm^3 で、雪質はしまり雪であった。3月22日では 0.360g/cm^3 の密度で、しまり雪とこしもざらめ雪とが混ざった雪質になっていた。4月4日には密度は 0.385g/cm^3 となっている。2月23日から3月22日までの斜面積雪と、 $\nu \approx 0.16$ を得た2月7日から3月6日までの平地積雪について考察する。この期間の斜面積雪の密度範囲は $0.285 \sim 0.360\text{g/cm}^3$ で、平地積雪での密度範囲 $0.327 \sim 0.370\text{g/cm}^3$ と大体重なっている。又、斜面積雪の雪温は図に示さなかったが、その温度範囲は平地積雪での雪温の範囲とほぼ等しい。更に、雪質も同じ変化を受けている。にもかかわらず、 ν_s は ν の約 $\frac{1}{2}$ になっている。

Salm⁵⁾は多くの著者が求めた雪の塑性ポアソン比について考察し、同じ密度でありながらこれらの塑性ポアソン比が大きく分散する理由として、(i)測定方法の違い(応力状態の違い)、(ii)ニュートン粘性流体の仮定からのズレ(非線型項の寄与)、(iii)積雪の組織の違い、の3点を掲げている。今回得た ν_s と ν については、主応力がそう大きくないことからニュートン粘性流体という近似は妥当なものであって、組織の違いも、上述した様に両者とも同じ雪質の変化を行なっていることから近似的には無視できる。よって、今回得た ν_s と ν の違いは、主に、応力状態の違いがもたらしたものと考えられる。

4. ま と め

平地積雪で直径の異なる2種類の雪圧計を使って、鉛直圧力、横圧力を両方の雪圧計で測定し、積雪を圧縮性ニュートン粘性流体と仮定して塑性ポアソン比 ν を計算した。その結果、2種類の雪圧計で測定値に差は現われず、密度 $0.327 \sim 0.370\text{g/cm}^3$ のしまり雪に対して、 $\nu = 0.16$ が得られた。この値は前回著者らが得た値とほぼ等しい。

最大傾斜線を含む鉛直面(流動面)で平面歪を起こす斜面積雪で、流動面内に法線をもつ面に働く3つの垂直圧縮応力をその方向とともに3個の雪圧計で測定し、連続的に流動面内の主応力 σ_1 , σ_3 を得た。同時に、等高線方向の主応力 σ_2 の連続測定も行った。積雪内の応力状態が急激に変わった時、雪圧計の測定値及び主応力にもその変化が現われ、この雪圧計がこの様な場合の有効な測定手段となることが判明した。主応力 σ_1 , σ_3 と σ_1 の方向 α について考察し、吉田⁹⁾の単独鉛直主応力状態が長期間持続したこと、及び、藤岡⁸⁾の計算式と定性的に $\sigma_1 - \alpha$ 関係が一致することが判った。

斜面積雪で得られた三つの主応力から、塑性ポアソン比 ν_s を求めた。この ν_s はほぼ同じ特性をもつ平地積雪から得られた ν の約 $\frac{1}{2}$ の大きさで、Salm³⁾の議論をもとにその原因を考察した。

本研究に際し、雪害科学部門の方々、天塩地方演習林の方々には大変お世話になった。ここに記して深く感謝いたします。なおこの研究は文部省雪崩特別事業費で行なわれた。

文 献

- 1) 大泉三津夫・藤岡敏夫 1982 斜面積雪の挙動の研究Ⅱ. 積雪の塑性ポアソン比1, 低温科学, 物理篇, 41, 43-54.

- 2) 大泉三津夫・藤岡敏夫 1983 斜面積雪の挙動の研究 XIX . 積雪の塑性ポアソン比 ν ; 低温科学, 物理篇, 42, 89-100.
- 3) 清水弘 1968 斜面積雪の内部歪 I, 低温科学, 物理篇, 26, 143-168.
- 4) Mellor M. · Smith J.H. 1967 Creep of Snow and Ice, *In* Physics of Snow and Ice, Part 2 (H. ôura, ed), Inst. Low Temp. Sci., Sapporo, 843-855.
- 5) Salm B. 1977 Snow Forces, *J. Glacio.*, 19, 67-100.
- 6) Salm B. 1978 Snow Forces on Forest Plants, *In* IUFRO Seminar Mountain Forests and Avalanches, Davos, 157-181.
- 7) de Quervain M. R. 1966 Measurements on the pressure at rest in a horizontal snow cover, *In* International Symposium on Scientific Aspects of Snow and Ice Avalanches, Davos Symposium, 1965. IAHS-AISH Publ. 69, 154-159.
- 8) 藤岡敏夫 1974 斜面積雪の挙動の研究IV. 斜面積雪内の応力, 低温科学, 物理篇, 32, 105-112.
- 9) 吉田順五 1980 斜面積雪の挙動の研究VII. 単独鉛直主応力状態, 低温科学, 物理篇, 39, 1-16.

Summary

Viscous analog of Poisson's ratio (or plastic Poisson's ratio) ν were measured in a snow cover on both a level ground and a mountain slope by the use of thin snow pressure gauges, by assuming snow as compressible Newtonian viscous fluid (eq.(1)).

Tow snow pressures, horizontal pressure P_h and vertical pressure P_v , were measured in a snow cover on a level ground. To check the size effect of the pressure gauge on the measured value, the authors utilized the gauges of the different diameters, type A (diameter = 10 cm, Fig.2) and type B ($d = 15$ cm, used in the previous measurement²⁾). Figure 3 shows P_v and P_h , snow temperature T , and ν calculated from P_v and P_h (eq.(3)). It is seen that there is little difference between the results from the gauges of both types. Values of ν were nearly 0.16 from February 7 to March 6, when snow was dry compact snow, with density ranging from 0.327 to 0.370 g/cm³.

Meanwhile in a mountain snow cover three normal compressive stresses σ_{θ_i} were measured using three Type-A pressure gauges, as well as their angles θ_i from the X - axis using the clinometer built in each gauge. The gauges were placed in a snow layer, with the normal of each pressure plate being in the Z - X plane where plain strain took place (Fig.1). Moreover, the principal stress σ_2 parallel to the Y-axis was also measured. The principal stresses σ_1 , σ_3 , and the direction of the first principal stress α are shown in Fig.5; they were calculated from σ_{θ_i} and θ_i in a similar way to the Rosette analysis in strain. It was confirmed that during the midwinter, 1) the mountain snow cover remained in the state of single vertical stress (Yosida⁹⁾), 2) the relation between σ_1 , σ_3 and α were similar to those formulas indicated by Huzioka⁸⁾, and 3) the snow pressure gauge was effective to pick up an abrupt change in stress, as seen in late February (the pressure variation occurred naturally) and early April (induced artificially).

Values of ν_s which were calculated from σ_1 , σ_3 and σ_2 according to eq.(4) are shown in Fig.6. They show a little fluctuations around 0.06, which are rather smaller than ν obtained from the snow cover on the level ground. As pointed out by Salm⁵⁾, the difference between ν_s and ν could be attributed to the difference between strain states, uniaxial strain (on the level ground) and plain strain (on the slope).